

東北大学附属図書館報



木這子

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

- 木這子（きぼこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ） -

目 次

○連載 和算資料の電子化（８）： 和算書にみる江戸の出版史..... 1	○平成16年度学術情報リテラシー教育担当者研 修に参加して.....18
○ガリレイ『天文対話』との出会い － 北青葉山分館特別閲覧室 7	○「図書系職員向け連続セミナー」開催報告...19
○思い出すことなど.....12	○最近の話題から（その３）「超売れっ子『臨 顧愷之女史箴図巻』」 22
○デジタル出版とデジタルアーカイブに関する 公開フォーラムの開催.....14	○附属図書館の概況.....23
○全学教育科目「大学生のための情報探索術」 にスタッフとして参加して.....15	○会 議.....25
○日本古典籍講習会を受講して.....16	○人事異動.....26
○平成16年度学術情報リテラシー教育担当者研 修での事例報告.....17	○編集後記.....26

連載 和算資料の電子化（８）：和算書にみる江戸の出版史

総務課情報企画係長 米 澤 誠

１．はじめに

江戸期は、はじめて商業としての出版が成り立つようになった時代で、江戸期を通じて約4,000弱の版元が約7万点の出版物を刊行するという、世界的に見ても有数の出版大国でした。

今回は、江戸期を通じて刊行され続けた和算書『塵劫記』の変遷をたどりつつ、江戸の出版史を通覧してみたいと思います。

２．江戸初期の出版：古活字版の流行

江戸初期には、キリスト教宣教師により西洋式活字印刷が、豊臣秀吉の朝鮮侵攻により朝鮮銅活字印刷の技術が伝わり、「古活字版」という活字印刷が行なわれました。

古活字版として最も有名なのは、「嵯峨本」です。これは、京都の豪商の角倉素庵がスポンサーとなり本阿弥光悦がデザインした書籍で、

紙質・デザイン・刷りに意匠をこらした美術品として今に伝えられています。

代表的な和算書として知られる『塵劫記』のうち、最古のものと考えられるのは次の横綴本で、古活字版であると推定されます（図1）。著者の吉田^{みつよし}光由は角倉家の一族で、角倉家の出版技術と財力を背景にして出版したものかも知れません。

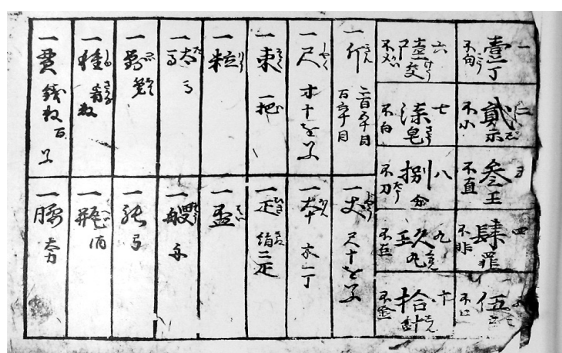


図1．古活字版『塵劫記』
寛永4年（1627年）序
活字版の特徴として字間が開いている

3．江戸前期の出版（1）：京都ではじまる整版出版

印刷を終えるごとに組版を崩す古活字版は、増刷・大量印刷に適さないために、商業出版が普及するにつれて廃れていきます。これに取って代わるのは、板木に一丁（2頁分）の原稿を彫って刷る「整版」印刷で、寛永年間（1624～1644年）に入ってから徐々に普及していきます。

図1と同内容の5巻本は、元和から寛永年間にかけての古活字版最盛期に整版印刷を行なったことで知られる、京都の杉田玄與という書店（書肆）から整版で刊行されています。

寛永8年版の改訂版『塵劫記』3巻本は、はじめから整版として出版されました（図2）。寛永11年にも再版されるこの3巻本は、いわゆる書店からではなく吉田自身が刊行したものとされています。もともと吉田光由の『塵劫記』は、商業的な目的というよりは教育的な目的から刊行されたものであると考えられます。

寛永期の整版出版は、仏書の需要が多く、出版技術が普及していた京都ではじまりました。



図2．整版『塵劫記』3巻本
寛永8年（1631年）吉田光由
格段に複雑なレイアウトとなっている

江戸前期（1600年代）の出版は、江戸よりも文化的に進んでいた京都を中心に発展していきます。寛永年間に開業した書店は、70軒も判明しているほどでした。

さて、寛永8年に吉田光由が京都で刊行した『塵劫記』は、早くも寛永9年に京都の版元による海賊版が刊行されます。冊子が一部あれば、それをもとに板木を彫ることができるため、著作権などという考えのなかった当時は、容易に海賊版が刊行されたのです。

寛永9年に『塵劫記』5巻本を出版した中野市右衛門は、京都で有数の版元でした（図3）。また、寛永18年に『新編塵劫記』3巻本を出版した安田十兵衛、寛永20年に同じく3巻本を出版した西村又左衛門も京都の版元です。

寛永20年の西村版は、その後の多くの版の原本となりました。岩波文庫『塵劫記』の底本にもなっているのですが、誤記が多いことでも知られています。吉田自身の校正が行なわれなかった海賊版であれば、その点も納得できるので

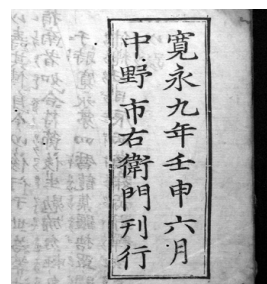


図3．整版『塵劫記』5巻本
寛永9年（1632年）中野市右衛門

はないでしょうか。名のある版元でも、堂々と海賊版を刊行していたということが、江戸前期出版の特色といえるでしょう。

4．江戸前期の出版（2）：三都での版元成長
当時江戸には地元の版元がなかったため、京都版元の出店で書物が販売されていました。多くの書店は、京都の版元の屋号を受け継いでいます。

しかし、承応年間（1652～1655年）になると、江戸で独自の出版活動が始まります。松会という江戸ではじめてとされる版元は、京都で出版されていた書籍を版式や挿絵を変えて刊行しはじめたことで知られます。新たに整版を作成する時は、内容は同じでも題名を変えるようなことをよく行なったようです（図4）。

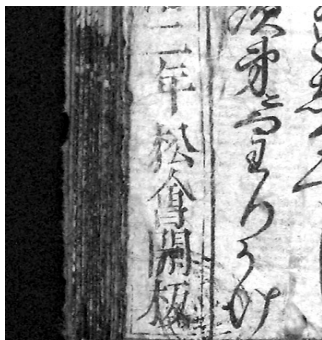


図4．『新板塵劫記』3巻本
萬治2年（1659年）松会

これも一種の海賊版であり、以後江戸でも多くの書籍が刊行されることとなります。江戸の版元が作った新版の『塵劫記』は、京都や大坂（大阪）で海賊版が作られることもありましたが、また逆に、京都で作られた『塵劫記』は、江戸や大坂の版元からも出版されることがありました。これまで、ほぼ同じ内容でありながら微妙に刷りが異なる版が存在することが疑問でしたが、三都の版元がそれぞれ別に板木を作成していたのであれば納得がゆきます（図5～7）。

元禄年間（1688～1703年）から、京都はもとより江戸・大坂でも急速に出版活動が盛んになります。元禄期には、京都で115、江戸で80、



図5．『新編塵劫記』3巻本
貞享2年（1685年）
京都川崎屋

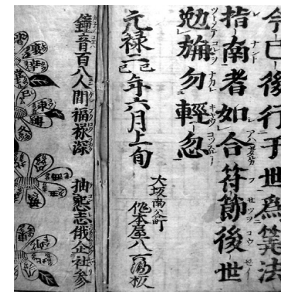


図6．同3巻本
元禄2年（1689年）
大坂作本屋

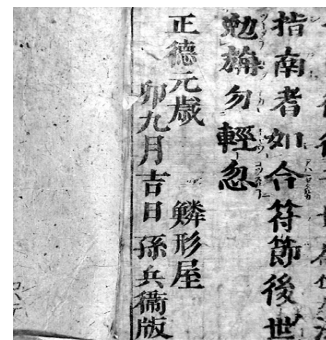


図7．同3巻本
正徳元年（1711年）江戸鱗形屋
3版とも本文は同じだが刊記が異なる

大坂で62の書店が開業していることが判明しています。元禄文化の代表者である西鶴や近松が上方の人間であることから分るよう、この時代までは江戸よりも京都・大坂の上方出版文化が優位にたっていたのです。

またこの頃には、書店で入手できる書籍を分類してリストアップした書籍目録が刊行されるようになります。寛文6年（1666年）頃から享和元年（1801年）まで20種ほど刊行されており、当時の書籍流通をうかがい知るための興味深い資料となっています*。

* 慶應義塾大学附属研究所所道文庫編、「江戸時代書林出版書籍目録集成」1～3、井上書店、昭和38年

5．江戸中期の出版：本屋仲間の誕生

海賊版が横行する中、享保7年（1722年）幕府は本格的な出版条目を出しました。全5条からなるこの規制では、「幕府の批判書」、「好色本」、「先祖に関する書物」、「徳川家に関する書

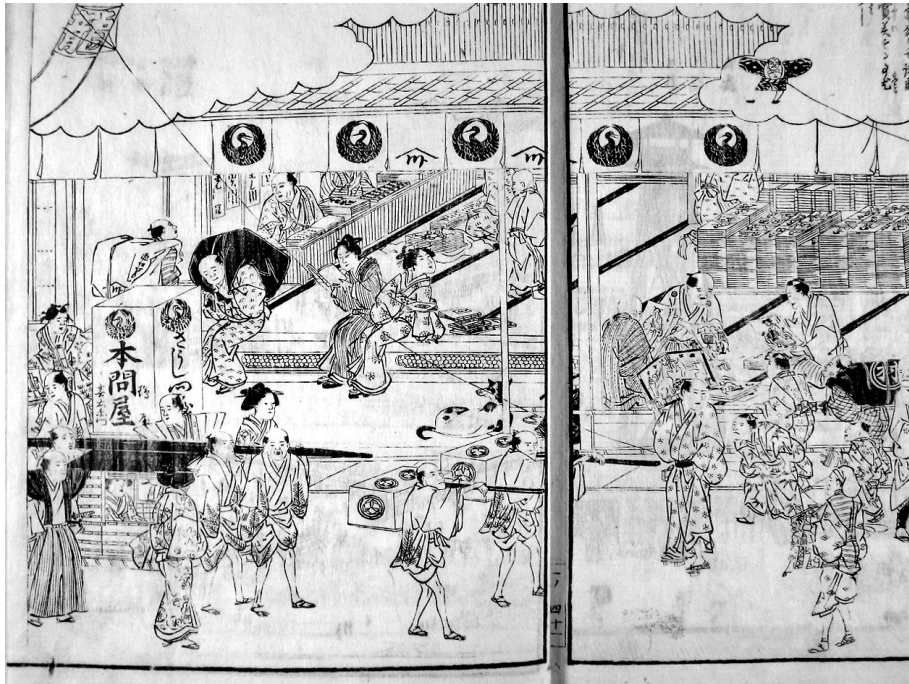


図8．京都の版元の出店，江戸通油町鶴屋喜右衛門の店頭（『江戸名所図会』より）
仙鶴堂として知られた本問屋で，錦絵（図右側）や草紙類（図左側）を製作・販売していた

物」の出版を禁止するとともに，「作者名・版元名を奥書に記すること」を義務づけました。これにより，日本の書籍に「奥付」が慣習化するようになったといわれます。

また同時期に，幕府は三都の版元に本屋仲間を結成させ，それを幕府として公認します。幕府は，この本屋仲間出版物の自主規制を行なわせるとともに，海賊版を厳しく規制させました。このため版權は一層明確となり，海賊版の横行は押えられることとなりました。

新たな出版物の板木を作成するには，本屋仲間による許可が必要であり，その記録は「本屋仲間記録」として残されています。三都の本屋仲間記録は，作者や版元代表者を確認するのに，今も有益な資料となっています。

1700年代の本屋仲間の結成により，江戸で出版される書物の点数は増加し，京都・大坂に並ぶものとなります。また，この時期に開業した書店は全国で約1,250軒にのぼり，江戸独自の文化の成立とされる元禄年間から化政年間につながる，江戸出版文化の成熟期であったことが分ります。鈴木春信，鳥居清長，喜多川歌麿な

どの，「雅俗融和」の品格をもった江戸を代表する浮世絵師が活躍するのもこの時代でした。

ひるがえって和算書の出版状況を見てみると，この時期に和算研究の主流であった関流は，その研究成果を秘伝としていました。正徳12年（1712年）に関孝和の遺稿として出版された『括要算法』以後，明和6年（1769年）の有馬侯の『拾璣算法』まで，関流の研究書籍が一点も出版されることがないという特異な和算時代でした。この時期に多く出版されたのは，『塵劫記』類や『勘者御伽草子』などの通俗和算書だったのです。

その『塵劫記』の出版状況を見てみると，本屋仲間の結成により規制された状況のもと三都の版元それぞれが独自の『塵劫記』を刊行することになります。この時期に，異なる内容とタイトルをもつ『塵劫記』が数多く出版されているのです（図9，10）。三都それぞれで刊行された書籍は，別の版元に板木が継承されることはあっても，他の土地に流出することは少なかったようです。



図9.『萬宝塵劫記大全』
正徳4年(1714年)江戸版



図10.『富貴塵劫記大成』
安永7年(1778年)京版

江戸の版元の急成長とともに、江戸にあった京都版元の店は明和～天明期(1764～1788年)に次々と店じまいしました。代わって江戸本屋仲間の主流となるのは、『武艦』の版元で知られる須原屋茂兵衛や、『解体新書』の版元である須原屋市兵衛などの須原屋一統でした。また、安永以降(1772年～)には、『吉原細見』や黄表紙の版元となる蔦谷重三郎が活躍することになります。

『拾機算法』の出版以降、『精要算法』、『神壁算法』などの良書が出版され、関流和算の成果が広く流通することになります。また関流に対抗した会田安明の著作の相次ぐ刊行は、江戸の出版の興隆が背景にあるといえるでしょう。

またこの頃、商業的書店による整版印刷での大量印刷とは別に、活字出版による小部数の印刷が行なわれていたことも忘れるわけにはいきません。これは古活字版と区別して、「近世木活」といわれています。禁書とされた林子平の『海国兵談』は整版で出版したものであり、後に活字版で印刷されたものは、本屋仲間の許可は不要であるため規制の対象外であったとされます(図11)。

6. 江戸後期の出版：共同出版と地方版

1800年代、文化・文政・天保年間(1804～1843年)になると、複数の版元が共同出資して刊行する書物が多くなります。その多くに三都の版元が参加し、後には名古屋がこれに参入して四都時代となります。少ない経費負担で、それぞれの地域での販売を目的としたわけです。

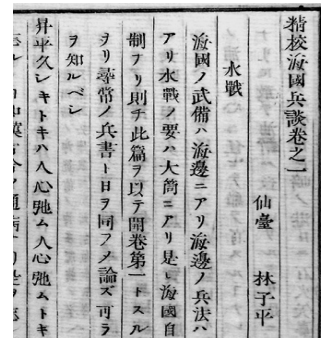


図11.『精校海國兵談』近世木活版
嘉永4年(1851年)序

当初は江戸の版元が、京都・大坂への販路拡大をねらって考えたものといわれています(図12)。

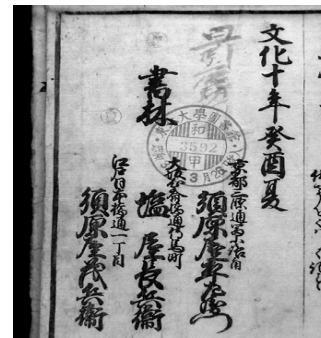


図12.『早引塵劫記』
文化10年(1813年)
須原屋茂兵衛など三都の版元が名を連ねている

同一の板木を使った書物でも、年代が下るにつれて奥書に記される版元の数が増えてくる傾向があります。新たな板木を作成せずに、版權だけを取得して販売するわけですから、版元というよりは、販売権をもった書店としての性格が強いといえます。

名古屋以外にも地方の版元が単独で出版する書物である地方版(もしくは田舎版)が現われてきます。仙台の版元からも和算書が刊行され、この時代には出版文化が地方にまで広まっていたことをうかがい知ることができます(図13)。

7. 整版印刷の終焉

明治に入ってからでも整版印刷は続き、多くの和算書が刊行され続けます(図14)。



図13.『永徳塵劫記大成』
文化2年(1805年)仙台版
国分町十九軒の版元池田屋源蔵版

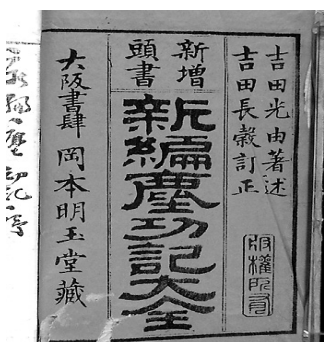


図14.『新編塵劫記大全』
明治18年(1885年)
吉田光由の末裔と称する改訂者による版

またその他に、平成16年度日本古典籍講習会(国文学研究資料館主催)の高大教授の講義資料を参考にしました。

なお、『塵劫記』諸版の整理・系統立てには、文学研究科の風間亜紀子さんに協力いただきました。ここに謝意を述べさせていただきます。

参考文献：

- 1) 今田洋三,『江戸の本屋さん』(NHK ブックス 299), 日本放送出版協会, 1977
- 2) 中野三敏,『書誌学談義 江戸の板本』, 岩波書店, 1995
- 3) 鈴木敏夫,『江戸の本屋(上・下)』(中公新書 568, 571), 中央公論社, 1980

(よねざわ・まこと)

しかし、長崎通詞出身の本木昌造により西洋式の鋳造活字が開発されてから、多くの出版物が活字で印刷されるようになります。蒸気機関の導入により、数万部単位の大量印刷が可能になると、大量の需要がでてきた新聞や『学問のすすめ』などのベストセラーは、活字印刷でしか対応できなくなりました。これ以降、江戸期とは比較にならない大量出版の時代に、江戸版元は完全に取り残され、「平楽寺書店」や「八文字書店」などの屋号が現代の書店名に引き継がれるだけとなったのです。

以上、『塵劫記』の諸版を事例に、かけあしで江戸の出版史をたどってみました。江戸の出版史の大きな流れを知ってもらうために、詳細には立ち入らないようにしました。さらに興味のある方は、下に示した参考文献から読みはじめてみてください。

ガリレイ『天文対話』との出会い - 北青葉山分館特別閲覧室

東北大学情報シナジーセンター学術情報研究部 小 川 知 幸

1. 雪の訪問

昨年末以来の大雪にふたたび見舞われた2月半ばのある日、私は北青葉山分館の特別閲覧室を訪れていた。午前中の乾いた雪が午後には湿り気を帯びて、瘡蓋のようにコートにまとわりついてくる。その雪を玄関で思い切り振り落とすと、人影もまばらなエントランスホールにおずおずと足を踏み入れた。名前を告げてまもなくカウンターの奥から現れた、すらりとした美男子に案内されて、私は、居並ぶ書架の突きあたりひっそりと佇む2階の小さな部屋に通された。

北青葉山分館は、昭和60年（1985）に竣工した鉄筋コンクリート3階建ての、本学の分館の中でも、もっとも新しい建物である。しかし、その蔵書の歴史は古く、明治44年（1911）の東北帝国理科大学創設にまで遡る。当時の図書は理科大学、すなわち、その後の本学理学部の各学科の図書室に分散されて所蔵されていた。これらの図書が数学物理共用書庫、理学部中央図書室を経由したものと併せて、理薬分館の構想のもとに昭和57年（1982）、現在の北青葉山分館に集中され、現在に至るのである。

したがって、同分館の蔵書は、久しく数学・物理・化学・岩石・地質学、生物・天文・地理などの図書室に分掌されていたものであり、同分館は、今もその蔵書の大半を学科「旧蔵書」としてそれぞれ分離排架している。わけでも物理学科図書室の旧蔵書には、貴重とされるルネサンス期の文献が多数含まれていることが、最近、『東北大学百年史』などの記述によって一般にも知られるようになった。私はその調査に来たのであった。

2. 17世紀の刊本

特別閲覧室は小さな店先ほどの部屋であった。中央の閲覧用テーブルが狭い部屋を圧倒している。そこに入ると、上気した肌が汗で湿ってくるのに気づいた。窓はあるが、雪の乱反射のせいか、ほの白い薄明かりを放つばかりである。窓には自然光を採り入れたり換気をする機能はない（もちろん、それが適切である）。壁面の一つに大きな木製の書棚が据え付けられ、上下二段の鍵の掛かるガラス戸の中に、目的の図書が収められていた。およそ100点を超える、一見して19世紀後半から20世紀初頭とわかる背革板紙装の大柄の図書が並ぶその中に、全体の1割程度であろうか、革やヴェラムで装丁された図書が散りばめられていた。

17世紀の刊本である。

3. 『天文対話』

年月を経て、さすがに、ところどころ皮革の劣化が見られるが、整然と縦置きで棚に収められた図書の状態は思ったよりも良好である。汗の湿りが乾いたころ、私は最初に目にとまった小型のヴェラム装に手を伸ばした。

そのタイトルページにはラテン語でこう書かれている。Systema cosmicvm, in quo quatuor dialogis, de duobus maximis mundi systematibus, Ptolemaico & Copernicano, utriusque rationibus philosophicis ac naturalibus indefinitè propositis, disseritur...「世界体系、プトレマイオスとコペルニクスの世界の二大体系について、双方より哲学的・自然学的な根拠が提示された4日間の対話」。

ガリレオ・ガリレイの『天文対話』のラテン

語版である。(図1)

すでに邦訳もあり、あまりによく知られたガリレイの代表的著作であるが、簡単に解説を試みてみよう。

若くして物体の運動法則に心惹かれたガリレイは、若干25歳にしてピサ大学の数学私講師に迎えられ、有名な落体の実験を行っている。その後1604年に新星が観測されたことをきっかけに天体観測にのめり込み、自ら望遠鏡(ガリレイはオッキアーレ(眼鏡)と呼んだ)を改良することでついに木星の衛星を発見するにいたった。しかし、観測を重ねるうちに、これまでのアリストテレス世界体系に疑問を抱くようになり、この『対話』によってコペルニクス体系に与することを宣言し、宗教裁判にかけられた。

『天文対話』は、その名の通り、サルヴィアティ、サグレード、シンプリーチョという3名の論者が宮中で出会い、6日間にわたって世界の二大体系をめぐって議論するというかたちで構想され、その4日目までを記録したものであるが、アリストテレスとプトレマイオスの体系の継承者として登場するこのシンプリーチョという人物が、「まぬけ、馬鹿者」を意味していることからわかるように、ガリレイの意図は明らかであった。『対話』はローマ教皇ウルバヌス8世の怒りを買ひ、禁書として、いかなる頒布も禁じられるとともに、ガリレイ自身は自説の撤回(異端誓絶)を強要された挙げ句、老

齢ゆえに入牢こそ免れたものの、追放刑に処せられししまう。このときガリレイは69歳であった。

よく知られた伝説の言葉、「それでも地球は動いている」は、この『対話』がキリスト教圏に巻き起こした騒動とその結末を端的に表している。

4. 二度の裁判

しかし、じっさいの事情は少し違ったらしい。というのも、『対話』の初版は俗語であるイタリア語で執筆され、1632年2月に刊行されている。同年7月には出版禁止処分が下され、翌1633年に異端誓絶に至るのだが、すでに1635年にはシュトラズブルクでラテン語版が印刷されている。神学者ミカンツィオは、これでヨーロッパ中にコペルニクス体系派が増えたと喜び、ガリレイに書簡を送ったほどである。だが、そもそもガリレイはこの『対話』を、世間の誤解を解こうとして執筆したという。

じつは彼は、出版以前にすでに異端として告発されており(第一次裁判)、そこで曲解された運動法則の丁寧かつ平易な解説を志したのであった。出版に先立っては当局の検閲もすませてあった。

問題は、むしろガリレイと教皇庁を取り巻く政情にあった。教皇はローマにおけるハプスブルク帝国の勢力伸張を恐れ、密かにフランスおよびスウェーデンの新教勢力と手を結んでいたが、これが発覚し、旧教側のスペイン・ハプスブルクから強い非難を受けていた。また、固有の権力基盤であるトスカナ地方ではトスカナ大公フェルディナントがハプスブルク家の後押しによって地位を回復しつつあった。大きな反響を呼んだ『対話』の容認は、教皇の権威を脅かしかねないものだったのである。都合の悪いことにトスカナ大公はガリレイの庇護者でもあった。『対話』は、大公フェルディナントに献呈されていたのである。

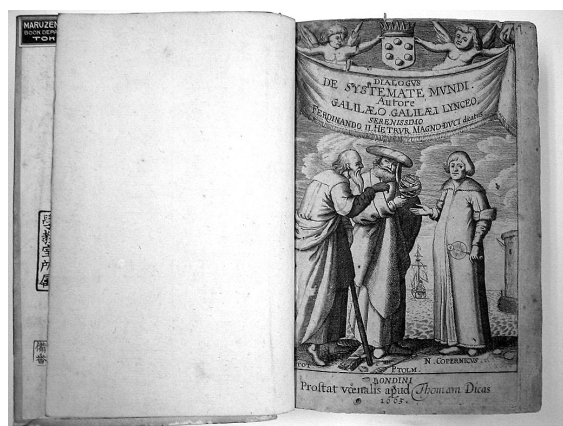


図1.『天文対話』

5. 受容と普及

こうして、ふたたび異端として告発されたガリレイは、第二次裁判において自説を撤回するに至る。先の書簡にガリレイは、「あの書物は忘れ去ってしまうのがのぞましい」と答えている。その後200年を経た1835年になって、ようやく『対話』は、禁書目録から外されることになったのである。

ところで、いま私が手にしているラテン語版は、ロンドンで1663年に刊行されたものである。これは何を意味しているのか。小型のヴェラム装であるこの冊子体が示すのは、『対話』が刊行以来数十年にわたり、大陸をこえたイングランドでさえ、ヨーロッパの知識人層のあいだで広く読まれていたという事実である。ラテン語で書かれ、安価で携行しやすい小型の版型に組まれていることが、すでに学術文献のスタンダードとして受容されたことを物語っている。

この段階で『対話』は、ラテン語版だけでもおそらく数千部以上が刷り増されていたであろう。その限りで、手許のラテン語版は必ずしも稀少なものとはいえないが、しかしその存在自体が、この文献がいかに読まれ、いかに普及したかということ、そして17世紀の知識人たちに与えたインパクトを傍証しているのである。

6. 『宇宙を観る人』

さて、ガリレイの学問上の後継者として知られているのが、オランダの数学者クリスティアン・ホイヘンス(Christiaan Huygens)である。「若返ったガリレイ」とも称される早熟の天才であった。彼は、ガリレイが『対話』を執筆しつつあった1629年にハーグに生まれ、26歳のときに自作の望遠鏡で土星の衛星タイタンを発見する。

ガリレイの望遠鏡がおよそ20倍の倍率であったのに対し(一説には33倍)、ホイヘンスのそれはじつに92倍にまで改良されていた。ガリレ

イの望遠鏡では土星が三連星のように、あるいはあたかも土星が耳をもっているようにしか見えなかったために誤って衛星と考えられていた土星の「環」が、これによってはっきりと確認されたのであった。まさに科学における観測の重要性を示す出来事といってもよい。欧州宇宙機関(ESA)の土星探査船カッシーニに搭載された小型探査機にホイヘンスの名が付けられていたことはまだ記憶に新しい。

彼の手になる著作の一冊を、私はガラス戸の中に見出していた。今日の学術書とあまり変わらぬ大きさであるが、わずかに縦長で、ほっそりしたシルエットの革装の冊子体である。そのタイトルは、「The celestial worlds discover'd: or, Conjectures concerning the inhabitants, plants and productions of the worlds in the planets」とある。直訳すれば、「解き明かされた天界、あるいは惑星上の居住者、植生、産出物にかんする推定」となるが、『宇宙を観る人』(Kosmotheoros)と題するのが適切であろう。(図2)

晩年に執筆されたこの本は、いわゆる主著ではないにせよ、ホイヘンスのこれまでの研究の集大成であるとともに、当時の最新の天文学的知識を盛り込んだものといわれる。最初はラテン語で書かれたが、ホイヘンス没後の1698年に出版されるにあたって、同年にロンドンで英語版も出版された。手許の一冊は、この英語初版

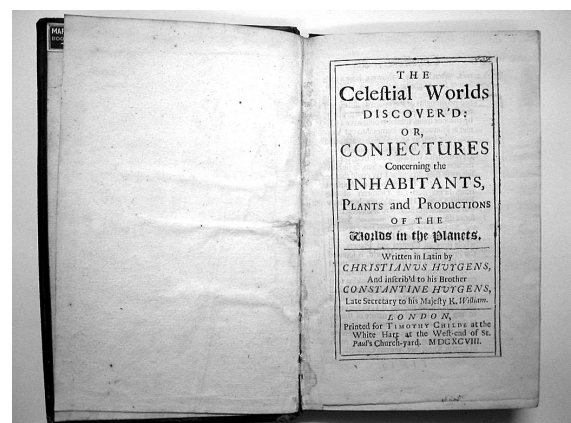


図2. 『宇宙を観る人』

である。

7. 地球外生命体

この中でホイヘンスは、地球以外の惑星にも、その斑点の動きからすれば「自転」があるだろうし、地軸がわずかに傾いていることからすれば、「季節」もあるにちがいないと推測する。そして、そこには地球と似たような生命体が存在するだろう、ただし、太陽からの距離を考えれば、それははるかに寒冷な環境に適応しているだろうと述べる。地球に特権的地位を認めないコペルニクスの宇宙観！ ガリレイの『天文対話』から、たったの60年で、地球はなんとありふれた惑星になったことかと感嘆せざるをえない。

しかしながら、ホイヘンスはこうも述べている。「神の業の大部分が人間の眼の届かぬところに置かれており、人間とは何のかかわりも持たぬように思われるからこそ、それらの業を近くから眺め、これに驚嘆する存在がどうやらあるはずと考えることができる」(原亨吉訳)、すなわち、他の惑星上にも人間のように、神を讃える生命体がいらないはずはないというのである。また、こうも述べる。それらの惑星は、美しさや威厳において地球に勝ることはないのだと。

『宇宙を観る人』は、出版されるやいなや5カ国語に翻訳され、好評を博した。ホイヘンスの影響で、今なお人類が太陽系の果てまでも生命体を探索し、旅立とうとするのだと言えば、言い過ぎであろうか。

8. ニュートン

故郷のハーグをほとんど離れなかったホイヘンスは、60歳のときにロンドンの王立協会を訪れ、若きニュートンと会談している。一昨年に『自然哲学の数学的原理(プリンキピア)』を刊行した気鋭の科学者に触発されて、ホイヘン

スは主著となる『光についての論考』(1690年)を発表する。この中で彼はいわゆる「ホイヘンスの原理」を確立し、さらに、これに答えてニュートンは『光学』(1704年)を刊行する。

ホイヘンスはニュートンへと引き継がれてゆくのである。

ニュートンの著作についても、特別閲覧室の書棚に上記のものがそれぞれ1点ずつ備え付けられている。18世紀後半の版型の大きな、堂々たるカーフ(仔牛革)装の図書である。木箱に収められており、版次がやや遅いせいもあるが、状態は非常によい。

その他ガリレイ、ホイヘンス以外の文献で17世紀の刊本としては、ベーコン(フランシス)、ガッサンディ、ボイル、ギルバートらの著作が所蔵されている。なかでもギルバートの『磁石論(De magnete)』は、1600年にロンドンで刊行された初版であり、特別閲覧室の最古の文献として輝きを放っている。

9. むすび

時計を探ると、文字盤はすでに訪問から2時間あまりが経過したことを示していた。予定ではその半分で十分だと高を括っていたが、居並ぶ顔ぶれの見事さに圧倒され、夢中になってしまったのかもしれない。あるいは、雪の白光が夕暮れを隠しただけだろうか。

ともあれ、以上で特別閲覧室の図書群の中核となる17世紀の刊本については一瞥を与えることができただろう。それは、ルネサンス期というよりもむしろ近代の科学の時代の幕開けを告げる、里程標となる重要文献を収集したものといつてよい。ここには古代的宇宙観の幕を引き、新しい世界像を呼び込もうとしたガリレイ、ホイヘンスをはじめとする数学者・物理学者たちの足跡が、いわば橋頭堡のようなかたちで収蔵されている。

このコレクション(とくに17世紀のそれ)は、

見返し紙に捺された登録番号によれば、明治44年から大正9年頃にかけて物理学教室に集められたものを中心としている。それらの図書は、国内書肆（丸善）を介して購入されたものが多いようだが、その頃の物理学教室が、ヨーロッパ留学から相次いで帰国した本多光太郎、愛知敬一、日下部四郎太らが講座を担当していたことを思えば、留学時に現地の古書肆の軒先で見初めたものを、丸善に命じて購入させたとも考えられるだろう。

その40年後、木造2階建ての理学部本館は昭和22年（1947）の仙台大空襲によって全焼したが、このような事態を予期して別の建物に移されていた物理・数学・天文学の図書室は、焼夷弾の直撃も延焼も免れて、これらの図書をよく守り抜いた。

特別閲覧室の書棚のガラスの奥から覗いている古びた刊本は、近代科学の足取りの一步一步を教えると同時に、先人たちのそのような想いも運び伝えているのである。

今回の調査では分館整理運用係の森脇係長、菊地係員に大変お世話になった。記して御礼申し上げる。

（おがわ・ともゆき）

参考文献

ガリレイ（青木靖三訳）『天文対話』（上・下）岩波文庫，1959 - 1961年
豊田利幸責任編集『ガリレオ』（世界の名著26）中央公論社，1979年
原亨吉「C.ホイヘンスの“発見”」(1・2)『自然』35 - 10, 11 (1980年)
ホイヘンス（原亨吉編，横山雅彦他訳）『ホイヘンス：光についての論考他』（科学の名著10），朝日出版社，1989年
S.G.ギンディキン（三浦伸夫訳）『ガリレイの17世紀』シュプリンガー・フェアラーク東京，1996年

山本義隆『磁力と重力の発見3 近代の始まり』みすず書房，2003年

伊木武雄「大学図書館の三十年」1・2・3，『同心』1・2・3（1949年）

『東北大学五十年史』（上・下）東北大学，1960年

田代寛「東北大学附属図書館における理学部中央図書室の発足」（上・下）『図書館通信』No. 35, 36（1967年2，3月）

「物理図書室だより」『図書館通信』No.40（1967年7月）

西尾茂子「東北大学理学部物理学教室図書室の貴重書について」『物理学史通信』（日本大学理工学部物理学教室科学史研究室）No.24, 29（1980年5月25日，1981年3月31日）

中島威「北青葉山分館長に就任するにあたって」『木這子』7巻2号（1982年）

「ギルバートの一冊の本」『北青葉山通信』No.2（1988年12月1日）

東北大学百年史編集委員会編『東北大学百年史 四 部局史一』東北大学出版会，2003年

思い出すことなど

電気通信研究所総務課図書係長 湯 本 智 子

私は昭和42年4月、工学分館の前身である工学部中央図書室に就職した。初めは工学部事務部もまだ青葉山に移転していない時であったので、中央図書室の業務が稼動するまでの約4ヶ月間を現在の記念史料館となっている本館において研修を受けた。当時本館には新規採用の女性が5人おり、工学部からの研修生2人をあわせると7人もの同期の桜がいたので、「皆で渡れば怖くない」といった雰囲気があった。しかし、当時の本館には専門職員の気品と尊厳のあるベテラン女性職員が多く、私たち新人がエネルギー溢れて大声でしゃべりながら事務室を歩くと、先輩に「しーっ！」と人差し指を口に当てて注意されたものだった。最初の研修先の受入掛には9人のスタッフがいて活気に溢れていた。初めて見る電動タイプライターになかなか慣れず一生懸命練習をしていると、上司から「電気が無駄だから仕事以外では使わないように。」と注意されるような時代であった。

また、本館にはギターの上手なジョーン・バエズのような美しい女性がいて、昼休みには彼女のギターの伴奏に合わせて芝生で「Green Glass of Home」等を皆で合唱したり、とても和やかな環境であった。さらに夏になると図書館職員有志で岩手山や鳥海山に登った。楽しかったことが今でも懐かしく雄大な風景と共によみがえってくる。この4ヶ月間の本館での充実した研修期間が終了してよいよ青葉山へ戻る日が来たときは、このまま本館で働きたいという心境になっていた。

工学部中央図書室での勤務が始まってからは、学科図書室が購入した図書の支払い業務と図書をライトバンで片平の本館まで運搬し、目録処理が完了してから再び図書を取りに行くというのが私の主な仕事であった。重量のある製本雑誌の運搬に対しては、事務部の運転手さん

がいい顔をせず、雨の日の運搬は図書を濡らさないように注意しなければならないので殊に大変な作業であった。しかし、農学部図書室の職員は北四番丁から片平までリヤカーを職員が引いて運搬したという記録を後で知り、四分館が出来るまでこの時代の職員は皆頑張っていたのだと痛感した。

また、当時の中央図書室では、毎日昼休みになると事務部の職員達と大勢で輪になってバレーボールをするのが日課となっていて、これによりストレス発散にもなり、工学部事務部職員との親交が一層深まった。

昭和40年代は東京大学医学部に端を発した大学紛争という歴史的な出来事があった。昭和44年10月16日未明、工学部中央図書室があった工学部管理棟が過激派学生に占拠され、電気系の大会議室に全事務系職員がすし詰め状態で仕事をすることを余儀なくされた。封鎖された管理棟の事務部のフロアの窓という窓は学生達によって黒い幕で覆われ、彼らがその幕の間から望遠鏡のようなものではす向かいの電気系の建物を監視していたのが見えた。事務部の上層部は心労極限に達していた一方、不謹慎にも私は何だか毎日がドラマチックでわくわくしていたのを覚えている。

大学紛争の波はやがて、国が立案した大学立法法案に対して国立大学がこぞって反対する動きへと移行して行った。私は職組には入っていなかったのだが、図書館女性職員の代表として国会請願に参加することを図書館職組の人から依頼され、図書館の代表の人達と共に国会議事堂に向かった。私は工学部の助手の人達と一緒にグループで、他の大学の人々とデモ行進した後何時間も国会議員会館のロビーで待機させられた。その後何人かが国会議事堂に入って審議を傍聴出来ることが認められ、私は幸運にもそ

の一人に選ばれた。真っ赤な絨毯が敷き詰められた廊下を緊張して歩いたことと、発言していた河野洋平代議士の存在感が印象に残っている。1日の行動を終えて宿に戻ると、折しもアポロ11号が初めて月面到着に成功したというニュースが流れていた。昭和44年7月29日のことである。はるか宇宙の彼方では人類が月面を歩いている一方、炎天下「大学立法反対」を訴えて国会に群がっている人間もいるという対比に不思議な感慨にふけたのである。

閲覧第二掛の時に、漱石文庫マイクロフィルム化作業に携わったことは、決して良い思い出ではなかったものの、またとない幸運な経験をさせていただいたと思っている。

平成7年10月1日に貴重書展示室の片隅で第一頁のマイクロフィルム撮影のシャッターが押された瞬間、思わず私は撮影者と握手した。この時が漱石文庫データベース化へと続く道のりの第一歩だった。それから約1年半、撮影業者との打合せ、マイクロ版目録の編集等孤独な作業が続いたが、新たな発見のよろこびや、漱石研究者、編集者との出会いがあった。また、仙台市文化振興課の方と当時の情報サービス課長と共に漱石のご長男の夏目純一さんにマイクロ化事業の報告をするため夏目家を訪問したことは、希有の経験となった。純一さんの顔と漱石がオーバーラップして私は非常に緊張した。その後純一さんが亡くなった時、私は情報サービス課長に漱石の遺品類を東北大学に寄贈してもらおうようお願いしてみても如何でしょうかなどと僭越にも進言したことがあった。しかし、すでに遺品は神奈川近代文学館に寄贈されることが決まっていた。

また、平成12年6月29日に国立大学図書館協議会総会の研究集会において「漱石文庫自筆資料の整理とデータベース化」について報告することになったが、私にとっては非常に荷が重い業務命令となった。報告のレジュメを作ることにもさることながら、習熟していないパワーポイントでプレゼンテーションの概要を作成するのに大変苦労した。日常の業務としてはエルゼヴ

ィア社の円原価導入問題が起きていて、こちらでも勉強しなければならない状況であったので、私にとってこの時期が最も試練の時だったように思う。総会の会場は金沢市文化ホールだった。目の前の聴衆は全員が全国の国立大学の図書館長、事務部課長で、マウスを動かす手がふるえないようになどと念じながら自分の番を待っている時はまさに心臓が口から飛び出すという形容がぴったりの心境だった。さらに発表が終わって安堵の間もなく会場から質問があった。舞台が明るくて会場が暗いために質問者がどこにいるのかわからないので、おそらくあらぬ方向を見て答えていたであろう何とも間の抜けた自分の姿を想像すると、役目は果たしたものの今思い出しても冷や汗が出る。

38年を振り返ってみると、工学分館新館への移転の時積み上げられた段ボールの間に若い人たちがトランプをしていた光景とかヤギの糞をふみしめての農学部運動会とその賞品の土の付いた人参、そして愚かにも女子学生に混じってマラソンに参加して膝を痛めたことや、議事要録作りに悪戦苦闘した雑誌掛での毎日、その帰り道は、必ず缶ビールを買って帰ったこと等全くどうでも良いようなことばかりがフラッシュバックしてくる。

今思うことは、かつて図書館の電算化導入の時にそれを開拓した先輩達、さらに電子化を推進し常に先導的な役目を担っている若手の人達、さらには法人化に伴う会計システムの開発に携わっている人達の努力に対して謙虚に敬意を表する。前にどなたかが永年図書館の維持・発展に貢献してきたと自負している図書館員の科学的裏付のない経験は昔話の種にしかならないと言っていたが、私達は微力ながらも彼らを常に側面から支え続けてきたという自負がある。

最後に、私を支えて下さった人々に深く感謝いたします。

(ゆもと・ともこ)

デジタル出版とデジタルアーカイブに関する公開フォーラムの開催

附属図書館では、理学研究科数学専攻との共催企画として、デジタル出版とデジタルアーカイブに関する公開フォーラムを平成17年1月24日に開催しました。

この公開フォーラムは、米国の講演者により海外の最先端の動向を学内外に紹介し、わが国における同種の取組みに指針を示すことを目的としたものでした。

フォーラムではまず最初に、コーネル大学図書館のデイビッド・ラディ氏により「オープンソース電子出版システム（DPubS）の開発」の紹介がありました。コーネル大学は、プロジェクト・ユークリッドにより世界的な規模で数学分野での電子ジャーナル化を促進しています。今回の電子出版システムは、メロン財団の補助金により開発を進めているもので、投稿から査読、電子的出版までを行なうことができるソフトウェアとなっています。このソフトウェアはオープンソースとして公開する予定で、他の分野の学術雑誌の出版にも適用できるものとして、非常に注目すべき試みであることが分る

という有益な発表でした。

次いで、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校のフィリップ・トンデュール教授により「デジタル・マセマティック・ライブラリーと遡及電子化プロジェクト」の講演がありました。トンデュール教授は米国科学財団（NSF）の数理科学部門長官を務めていた時代に、数理科学部門での予算規模を25%増加させたという経歴の持ち主で、今回の講演もその手腕の一端がうかがわれる意欲的な内容でした。既に数学分野では、世界的な規模で学術成果の電子化が進められており、わが国でも世界的な視点で学術情報の保存と流通の取組みを行なわなくてはならないと考えさせられた講演内容でした。

公開フォーラムには、国内の数学雑誌の編集関係者や図書館員29名の参加があり、講演後はそれぞれの講演者との間で活発な質疑応答が行なわれました。数学専攻と図書館では、平成16年にも研究者と図書館員が連携したフォーラムを開催しており、今後ともこのような形のSPARC活動を続けたいと考えています。



講演するトンデュール教授

（総務課）

全学教育科目「大学生のための情報探索術」にスタッフとして参加して

総務課情報企画係 永 井 伸

授業スタッフとして私は、2004年10月から4ヶ月間、ガラス張りの壁が特徴の情報シナジーセンターマルチメディア教育棟で行われた「大学生のための情報探索術」の授業に携わりました。この授業は、全学教育科目となっていることからわかるように、自分で調べ、考え、書くという、どの学部の学生でも共通して必要な能力を身につけるのが目的で、私自身学生時代にこんな授業があればよかったのと思うものでした。

図書館員が参加する授業は、東北大学では初めての試みということもあり、試行錯誤の連続でしたが、4ヶ月というまとまった期間の中で、100人程の学生の実習を補助するというような、普段と違った環境でサービスを行うことの効用は大きかったと思います。

たとえば、通常の講習会では時間の制約上、特定のツールの使い方を教えることしかできませんが、さまざまな情報源やそれを調べるためのツールにはどのようなものがあり、目的に応じてどう使い分けるかを体系的に教えることができる点は、13回の時間がある授業ならではの点です。

また、学生に対して図書館員の存在をアピールする上でも、授業は有効だったと思います。私たち図書館員は、教員の講義中には、さながら授業参観で我が子を見守る親のように、講義室の後ろに待機して講義を聴き、実習時には学生の間を見て回って、実習の進み具合を確認し、検索方法の手ほどきをしました。補助者は多いときには10名程度参加しました。資料があるのはもちろんのこと、図書館には図書館員がいて、聞けばいろいろと教えてもらえるのだということを実感してもらえたことと思います。

講義は、文系・理系をまたいで複数の教員が

担当しました。資料の貸出、相互利用の申込や購入希望といった教員からのさまざまな要望に対して、図書館が応えるという日常の関係とは違い、この授業は私たちが教員と協力して、まさに一から作り上げる必要がありました。雑誌価格高騰の抑止や、購読雑誌の選定など、図書館員と教員とが手をとってあたらなければ解決の難しい課題があります。授業に参加することは、確かに通常の業務に支障がないわけではありませんが、教員と協力する意識を促すきっかけとなり、長い目で見れば通常業務のやりやすさを増すことにもつながるのではないかと思います。

情報シナジーセンターの職員の方にもお世話になりました。実習で使った情報探索のためのツールは、ほとんどがウェブを介して利用するもので、コンピュータが快適に使えないと授業が成り立ちません。コンピュータに慣れておらずログインできない学生がいたり、Webブラウザが使えなくなってしまうといったトラブルがあったりしましたが、そのつど迅速に対応していただき、授業が円滑に進みました。

アメリカの大学・研究図書館協会の作成した情報リテラシー教育のための指針では、自分の力で情報を探し評価して、問題解決に生かす能力の育成には、図書館員と教員をはじめとする教育スタッフとの密接な協力が不可欠であることが強調されています。今回の授業は、講義を行う教員、設備を提供する情報シナジーセンター、そして図書館員の三者がそろった理想的な環境で行われました。特定の分野に偏らない図書館員のバランス感覚を発揮して、三者の関係をさらに親密にし、よりよい授業が実現できればと思います。

(ながい・しん)

日本古典籍講習会を受講して

総務課情報企画係長 米 澤 誠

平成17年1月25日から27日まで、国文学研究資料館が開催した古典籍講習会を受講しましたので、その開催内容について報告します。

この講習会は、今回2回目の開催となりますが、日本の図書館員向けとしては初めてのものでした。というのも、平成15年度は海外の日本研究図書館の司書向けとして開催し、その内容が好評だったことから、平成16年度は国内の図書館司書向けに開催することになったのです。大学や公共図書館・専門図書館から97名の応募があり、34名の受講者が選考されたとのことでした。

講習会のカリキュラムは、次の通りでした。

月 日	午 前	午 後
1 / 25 (火)	和古書目録の現状 閲覧室・書庫見学	展示会解説 書誌記述の要領
1 / 26 (水)	写本の奥書 くずし字の読み方	蔵書印の見方 古筆切の魅力
1 / 27 (木)	近世出版史 歴史資料の意義	和古書目録の作成要領 和古書目録の作成演習

私にとって特に有益だったのは「近世出版史」の講義で、刊記と版元に着目して江戸の出版史を概観したこの講義の骨子を参考として、本号掲載の「和算書にみる江戸の出版史」を書き上げることができました。また「くずし字入門」の講義では、自身の体験を交えた講師の分りやすい説明があり、今までとつきにくかったくずし字学習のコツを知ることができ有益でした。数百年の間、日本人が読み書きしていた「くずし字」文化が、現代において別世界のものとなっていることは、大変な文化的損失であると思いました。その他、「古筆切れ」や「蔵書印」などの講義内容もはじめてのことで、興味深く聴講することができました。

また講習期間中には、国文学研究資料館が所

蔵する資料を陳列して、古典籍の装訂、書型、本の各部位、用紙、写本と版本などを解説する展示会「和書のさまざま：書誌学入門」も開催しており、目で見て知識を確認できるよい機会をもつことができました。全体的に大変有意義な講習内容でしたが、ただ一つ改善点を指摘するなら、古典籍の目録実習時間をもう少し長くとることができればよかったということでしょうか。

私がこの講習を受講したいと思ったのは、和算資料電子化プロジェクトで古典籍を扱うようになり、図書館員として古典籍の知識は欠かせないと痛感したことによります。それまで私の主たる業務は、2次情報データベースと電子ジャーナルといった最先端の電子的資料の提供で、古典籍とは縁遠いところにあると思っていました。

しかし、図書館資料の電子化という業務を通じて、本学のように数多くの古典籍を所蔵する図書館は、古典籍を適切に保存し、後世あるいは広く社会に伝える義務があると実感しました。そのため図書館員には、古典籍に関する基本的知識をもち、書誌的な理解と適切な取扱いができる能力が必要となります。さらには、古典籍のデジタル化や複製出版、新たなコレクションの収集を行なう能力も求められてくると思います。

図書館員の古典籍に関するスキルアップのために、このような講習会は重要な意義をもちます。そして、このような機会をきっかけとして各図書館員が研鑽し続けなければ、古典籍を長く後世に伝えることはできないのです。私たちの重要な財産である古典籍を伝える営みは、図書館あるいは大学の重要な役割であることを、あらためて認識した講習会でした。

(よねざわ・まこと)

平成16年度学術情報リテラシー教育担当者研修での事例報告

情報サービス課閲覧第二係長 佐 藤 初 美

「平成16年度学術情報リテラシー教育担当者研修（主催：NII-国立情報学研究所）」において、東北大学附属図書館の事例を報告する機会を得ましたので、その概要を報告します。

この研修は昨年に引き続き関西会場と関東会場の2箇所で開催され、当館からはそれぞれの会場に一名ずつ事例報告者兼研修全体のオブザーバとして参加しました。事例報告は、研修の初日に「実例を知る」という目的のもと3大学からそれぞれの担当者が発表するという形で行われました。事前の要請では、「東北大学附属図書館で作成した冊子体マニュアルの作成経緯とその体制づくりについて」報告して欲しいとのことでした。

事例報告をしたのは他に東京農工大学、慶應義塾大学で、リテラシーに関する実施内容は異なりますが、いずれも冊子のマニュアルを作成しているという共通点があります。ウェブ上の情報や教育ツールが全盛の中で、冊子作成に至った経緯や、人的資源の不足が共通の話題となっている中、どのようにチーム体制を整えたかが受講者側の関心を集めると考えられたのではないかと思います。当館としても、各館において種々の取組がなされている中、決して先端を行っているわけではなくむしろリテラシー教育については後発と言ってもいい位置にありながら、全国的な研修の場で事例報告の機会を得たことは、印刷物という非常にアピール性の高い媒体を利用したことによるものではないかと考えています。ただし事例報告の中でも度々触れましたが、リテラシー教育においてデジタルコンテンツを軽視しているわけではなく、ウェブ上の情報も充実させつつ、さらに効果を上げる

ため印刷物が持つ力というものを併用した例とすることができますと思います。

また体制づくりについては、まず実施効果を訴える企画書で上層部の理解を得ること、係、課、本館、分館などの枠の中だけで実施するのは困難であり、キャンパスをも超えた全学体制で取組むことで成功したことを報告しました。さらにマニュアルの完成がきっかけで設置することができた情報リテラシーに関する全学教育授業についても、関心の高い教員の協力を得ながら、軌道修正しつつ進めている最中であることを報告しました。

受講者からは、「全学として取組む体制をとったこと」や「印刷物の利点を再認識した」ことなどに好意的な意見が寄せられました。また「更新頻度」や「印刷物作成のための継続した予算」などについて質問がありましたが、これらは情報リテラシーをめぐる環境の変化によって最適な方法をとっていく中でおのずと決まていくものではないかと思います。ウェブからの提供、印刷物での提供のどちらに固執するものでもなく、別の手段が現れるかも知れません。その時に柔軟に動ける体制づくりは必要だと思います。当館が今後目指すべき方向としては、より実施の歴史が古く方法も多様な海外の例に注目するのが必要だということも実感しました。今後も、東北大学の学生であれば情報探索については世界的に見て遜色ない、といわれるような効果的な方法を模索していきたいと思えます。

（さとう・はつみ）

平成16年度学術情報リテラシー教育担当者研修に参加して

情報サービス課参考調査係長 大 原 正 一

「退屈な講義は眠ってればいいんですよ。試験もないし」確か、こんな風に言われて参加した研修だが、会場についたとたん、期待は裏切られてしまった。席は指定席。五十音順のため最前列で、しかも講師席の目の前である。

一日目の事例報告のひとつは、「東北大学生のための情報探索の基礎知識」に関する講義。プレクで聴いているから、今回で二回目となる講義は、「企画書のコツ」が何度聴いても興味深かった。抜粋だが、テキストには次のように載っている。

館長、部長、課長を説得することが主眼

A4一枚（長くて二枚）にまとめる。

効果を最大限にアピールする。

文章は長くせず、箇条書きを多用する。

理解し易くするため、絵や図を入れる。

技術的用語は使わない。

組織の規模が大きいほど、説得する機会が増え、より重要になるだろう。

同様な事例報告として、東京農工大学図書館における検索マニュアルの作成があった。この場合も、館長との意見調整が重要なポイントとしている。

現在の職場（本館）に赴任しておよそ1年。以前の職場（分館）と同じ仕事をして、なかなか仕事が進まず戸惑うことがある。研修を受けて、ようやく原因の一つがわかった。

二日目の講義では、図書館員が登場するドラマが紹介された。「阿修羅のごとく」（1980年）「素顔のままで」（1992年）「ビューティフルライフ」（2000年）

一般社会（世間）において、図書館職員がどのように見られているかを知るには、このようなドラマや映画が参考になるという。

残念ながら、親しみにくい 融通がきかない 理屈っぽいなどマイナス面を見ることが多いそうだ。だが、そればかりではないだろう。

「ラブレター」（1995年）「耳をすませば」（1995年）「ハムナプトラ」（1999年）

研修では取り上げられなかったが、やはり図書館員が出てくる映画である。

「ラブレター」主人公の女性が北海道の市立図書館の司書。学生のときに図書委員を務め、職業として司書を選んだ図書館好き。

「耳をすませば」宮崎アニメのひとつ。学校の図書室や公共図書館も舞台になる。主人公の父親が公共図書館の司書。研究者タイプで娘の心を理解する良き父親でもある。

「ハムナプトラ」ミステリーアドベンチャーの外国映画。主人公の女性が古代博物館の司書。高い書架に本を並べようとして、フロア全部の書架をドミノ倒しにしてしまうドジな反面、古代文字解読の優れた知識と能力を持つ。

どれもプラスのイメージの図書館員が出演する映画だと思う。図書館が好きであること、知識が豊かであること、人間的にも魅力があることがプラスのイメージを創っている。

研修の最後は、小グループに分かれての共同討議だった。情報リテラシー担当者のスキルアップに関する討議では、方法として次のような意見が出た。自ら学習する。職員講習会を開催する。係間・職員同士の情報を共有する。

本学の例として、はパソコン講習会、は職員用ホームページの「スタッフルーム」を挙げたところ好評だった。

この他の講義や討議も有益な内容が多く、心配した睡魔に悩まされることもなかった。今後の業務に是非活かしたい。

最後になりましたが、今回の研修のために力を尽くしてくれた方々、特に研修中少ない人数でカウンターを守ってくれた参考調査係のメンバーに感謝いたします。

（おおはら・まさかず）

「図書系職員向け連続セミナー」開催報告

1. 「貴重図書はなぜ貴重か？」

多くの大学図書館には、呼び方こそ違っても「貴重図書」として一般の資料とは別の場所・方法で管理されている資料があります。当館においてもその選定基準が設けられ、基準に合致した和漢書・洋書などが「貴重図書」に指定されています。これらの資料は学術研究のための資料なので、その目的においては現物を利用することも可能ですが、おおむね200年～400年前の資料であることから「保存」の方に重点をおいた管理をせざるを得ません。展示会などの機会に、一般の方の目にふれることもありますが、実は多くの図書館職員にとっても、同じぐらい触れる機会の少ない資料なのです。

2004年春にこの「貴重図書」を管理する係に異動した際に、私自身の勉強不足があったことはもちろんですが、「貴重図書はなぜ貴重か？」という、いまさら人には聞けない疑問を抱いてしまいました。それを良い機会とし、じっくり勉強を始めるべきところですが、4月1日から、辞令をもらうより前に、どんどん利用問い合わせの電話は鳴り、FAX もメールも届きます。「聞くは一時の恥」と聞き直るしかなく、貴重図書を担当している先生に疑問があるたび伺っていました。現物を前にして、その来歴、資料としての特性、何が特別なのかなどあれこれ伺ううちに、「これは自分だけが聞いてはもったいない」と考えたのが、この連続セミナー開催のきっかけです。

2. スケジュール

資料ごとに担当する先生方、あるいは図書館職員などに講義を依頼し、快諾いただきました。かなり大まかに分けたのですが、コレクションの内容も多岐にわたることから、全6種類の講

義となりました。また、なるべく多くの職員が参加できるよう2回ずつということにしたので、計12回のコマを開催することになりました。スケジュールと参加人数は以下のとおりです。

■ 第一期（参加者合計：126名）

月 日	9 : 45 - 11 : 45	13 : 30 - 15 : 30
7 / 5		和漢書
7 / 7	文書	
7 / 9		洋書
7 / 13		洋書
7 / 14	漱石文庫	
7 / 15		和算
7 / 16	経済	

■ 第二期（参加者合計：76名）

月 日	9 : 45 - 11 : 45	13 : 30 - 15 : 30
8 / 3		和漢書
8 / 5	和算	
8 / 6		文書
8 / 9		漱石文庫
9 / 13	経済	

3. 各コマの内容

各コマの内容については、セミナー開催の趣旨を伝えた後、詳細は各先生、職員にお任せしました。以下に概要をご報告します。

■ 和漢書（大原助手：情報シナジーセンター学術研究部（以下：シナジー））

まず、貴重書の選定基準から説明があり、和漢書資料の取り扱い方についての資料配布もあった。その後いくつかの特徴的な資料を前に解

説があった。

展示会などでよく出品される「海幸」は、色彩が鮮やかな点に常に注目が集まる。魚の体表部分には光沢を出すために雲母が使用されているが、ガラス越しの展示だとそこまではわかりづらく、今回照明などを落として直に見ることで初めてその効果を実感できた。



■ 文書（曽根原助手：シナジー）

「古文書」の定義から始まり、所蔵する代表的な文書について概要の説明があった。それらの中でも注目度の高い「秋田家史料」を中心に、足利、豊臣、徳川、伊達など各武将による書状の比較などがあった。

ここでは特に、書札礼といって、身分が上がってくるにしたがって使用する文言が異なったり、花押（サインのようなもの）の使い方が異なったりすることの実例を見ることができた。使用する紙も上質になっていく様子を実際に紙に触れてみることで実感できた。

■ 洋書（小川助手：シナジー）

2004年3月に発行されたばかりの「新訂貴重図書目録 洋書篇」の編者である講師から、洋書コレクションの概要について実際に書庫内を歩きながら説明があった。

アインシュタインの手紙や、ニーチェ書簡など、代表的な資料について何点か解説があった。

特に参加者の興味をひいたのは、その時たまたま貴重図書に推薦されていた図書があり、それを選定するのが妥当かどうかを多方面から検討してみせたことであった。どのように価値を判断するのか、が具体的にわかって受講者に好評であった。

■ 経済関連資料（大村教授：経済研究科）

マルクス、アダム・スミスらの著作の初版本など、主にその来歴などを中心に説明があった。マルクスの書き込みがある資料もあり、それをめぐっての国内著名経済学者のやりとりや、ご夫人方の動向までも含めた解説が、経済という堅いイメージを持っていた受講者にとっては新鮮に受け止められた。特に購入価格の話などで具体的な金額が出ると、深くうなずく姿も見られた。

書誌的な話では、同一の版での微妙な相違が示され、その理由などについて受講者とのやり取りもあり資料を囲んでのにぎやかな講義となった。



■ 漱石文庫（木戸浦：附属図書館）

2004年の企画展で、このコレクションを取り上げたばかりだったこともあり、概要については知っている受講者が多い資料のため、今回は「漱石と西洋美術」とのかかわりについてスポットをあてた解説となった。

漱石がロンドンで収集した資料の中にも美術資料が豊富で、関連する論文などもいくつかあるが、普段は聞くことのない漱石の一面を知ることができた。実際の漱石の作品の中の文章と、西洋美術の作品を提示し、その影響がどこに現れているかなど、その場で見比べたりできたことが「非常に勉強になった」とする感想が多かった。

■ 和算資料（米澤：附属図書館）

2005年の企画展のテーマでもあり、貴重図書にされている資料もあったことから、展示予定の資料中心に解説があった。

エントランスの常設展示でも何点が展示していたので、そこから歩いて書庫へまわり、林集書始め代表的な和算関係の資料を概観した。その後、代表的な資料について、和算史の中での位置付けや特徴などの解説があった。また、関連する資料として、和算をモチーフにした少年少女向け小説の紹介などもあり、企画展へ向けて職員の関心と理解を深めることができた。

4．今後の企画

今回の企画は、図書館員として「資料を知る」ためのほんの始まりだったと思います。現物を見て、解説を聞き、感嘆するだけならば誰にでもできます。もともと図書館員は、資料について語ることができて当たり前でした。それが貴重な資料ならなおさら、です。ただ、現場では資料の「管理」に精一杯で、「知る」ための時間を割くことはほとんどできないのが現状だと思います。しかし、今回の受講者から「現物を見ることの大切さが実感できた」、「今後も続けて欲しい」といった感想が多く寄せられ、職員自身も現状に甘んじていていいわけではない、という意識が強いことがわかりました。各自の努力によるべき部分はあるかと思いますが、そ

の努力を始めるための「きっかけ作り」を今後も企画していければと思います。

最後になりましたが、唐突な申し出にもかかわらず、趣旨をご理解の上講義をご快諾いただいた先生方、多忙な業務ローテーションの中、やりくりをして参加して下さった職員の皆さまに感謝申し上げます。

（閲覧第二係）

最近の話題から（その3）「超売れっ子『臨顧愷之女史箴図巻』」



「展覧会への出品依頼ですね？ えーと、はい、その期間なら他の展覧会から戻ってきてますので大丈夫です。ご返却はいつごろになりますか？」 -

貴重資料の各種展覧会への出品手続きも閲覧第二係の担当ですが、すでに2005年のスケジュールがいっぱいになっている資料があります。それが今回紹介する『臨顧愷之女史箴図巻』で、春先から秋風が吹く頃まで、全国各地の美術館をまわる予定です。

『臨顧愷之女史箴図巻』は、小林古径と前田青邨が、大英博物館に所蔵されている「女史箴図巻」を模写したものです。この作品は、西晋の張華が撰述した「女史箴」という文章を、東晋の顧愷之が絵画としたものです。古径と青邨がこの絵を模写したのは、本学の福井利吉郎教授の発案によるもので、大正12年（1923）に完成しました。古径が40歳、青邨が38歳の時のことです。およそ50日間大英博物館に通いつめ、東洋の線画で最高峰といわれていたこの作品を模写したことは、その後の二人の画風に大きな影響を与えたことはもちろん、この作品の優れた模写を日本にもたらしたという大きな意義をも持つことになりました。

当館には、この模写と、大英博物館所蔵の原本のレプリカがあります。日本画の大家二人による作品とあって、海外からの来客時や、国内の視察時などに貴重書展示室に展示する機会が

多く、その場合は、双方を並べて展示することで、二人の苦心の一端を伺うことができるよう工夫しています。

2004年秋に仙台市博物館で開催した「国宝『史記』から漱石原稿まで - 東北大学附属図書館の名品 - 」展の図録の表紙もこの作品が飾っています。

美術雑誌や新聞の文芸欄、各種記事などに写真で紹介されることも多く、この場合はフィルムのみを貸出しています。思いがけないところで皆さんの目に触れることがあるかもしれませんね。



借受のため来館した学芸員の方と、美術品専門の運送業者による梱包作業の様子

（閲覧第二係）

附 属 図 書 館 の 概 況

この概況は毎年実施される大学図書館実態調査のうち主な項目をとりまとめたものである。表 1 は平成13年度～平成15年度の概況、表 2 は平成15年度部局別のものである。

表 1

区 分		平成13年度	平成14年度	平成15年度
蔵 書	和	1,850,223 冊	1,865,844 冊	1,892,573 冊
	洋	1,804,020	1,818,812	1,822,816
	計	3,654,243	3,684,656	3,715,389
所 蔵 雑 誌 数	和	31,517 種	32,891 種	33,404 種
	洋	37,797	36,963	36,952
	計	69,314	69,854	70,356
年 間 受 入 数	和	36,923 冊	35,948 冊	41,768 冊
	洋	29,695	26,439	24,922
	計	66,618	62,387	66,690
年 間 雑 誌 受 入 数	和	11,764 種	11,713 種	11,924 種
	洋	8,010	7,563	7,271
	計	19,774	19,276	19,195
奉仕対象 者 数	学 生	18,329 人	17,315 人	18,439 人
	教 官	2,571	2,645	2,589
1人当り 奉仕対象	蔵書数(冊)	174.8	184.6	176.7
	年間受入冊数(冊)	3.2	3.1	3.2
	図書館資料費(千円)	42.0	44.3	42.1
図 書 館 職 員 数	総 数	135 人	134 人	135 人
	専 任	68	65	64
	臨 時	67	69	71
図書館職員1人当り奉仕対象者数		154.8	149.0	155.8
図 書 館 資 料 費 (千円)		877,030	884,574	866,268

表 2

部局	職員数() は定員外職員 の内数	蔵書(平成16年3月31日現在)				平成15年度受入冊数				平成15年度経費				施設(平成16年3月31日現在)												
		図計	和洋	雑誌	(種類数)	図計	和洋	雑誌	(種類数)	図書雑誌 (千円)	図書雑誌 (千円)	図書雑誌 (千円)	図書雑誌 (千円)	延面積 (㎡)	閲覧室 (㎡)	書庫 (㎡)	収容可能 冊数 (冊)									
本館	50 (25)	1,075,153	711,636	363,517		21,830	13,854	7,976		11,947	9,857	2,090	3,805	2,992	813	48,344	22,610	449	71,403	399,001	18,215	5,706	4,729	1,131	1,757,528	
	2 (2)	430,331	277,302	153,029		2,366	1,276	1,090		9,654	6,983	2,671	1,281	708	573	43,458	18,929		62,387	4,422	68	2	10	1	4,972	
	3 (3)	101,005	60,125	40,880		1,190	749	441		2,460	1,775	685	575	407	188	12,642	9,760		22,402	7,593	200	59	107	17	27,389	
	3 (0)	264,417	119,665	144,752		1,826	1,061	765		12,716	9,855	2,861	1,315	729	586	44,874	13,133		58,007	21,019	705	35	540	24	81,028	
	4 (2)	375,402	194,770	180,632		3,561	2,214	1,347		5,307	3,690	1,617	1,946	1,346	600	20,386	32,357		52,743	26,581	286	46	162	23	27,472	
	1 (0)	31,002	18,032	12,970		741	425	316		70	4	66	100	79	21	183	3,452		3,635	7,363	241	28	197	6	22,500	
	3 (0)	75,599	19,631	55,968		1,427	372	1,055		709	162	547	206	121	85	1,364	31,032		32,396	12,217	917	86	482	11	127,667	
	1 (1)	33,637	12,939	20,698		492	79	413		239	54	185	13,098	13,056	42	468	9,869		10,337	3,187	207	70	127	27	39,111	
	2 (1)	35,887	9,955	25,932		932	374	558		1,579	898	681	369	195	174	4,936	16,353		21,289	17,814	579	86	380	31	56,000	
	1 (1)	5,662	869	4,793		100	8	92		60	0	60	5,636	5,626	10	0	3,026		3,026	2,600	98	12	35	4	5,778	
関係	2 (2)	17,469	12,675	4,794		46	32	14		2,143	1,529	614	83	53	30	8,867	2,915		11,782	5,663	120		110		22,917	
	72 (37)	2,445,564	1,437,599	1,007,965		34,511	20,444	14,067		46,884	34,807	12,077	9,765	6,663	3,102	185,522	163,436		449	349,407	507,460	21,636	6,130	6,879	1,275	2,172,361
	6 (3)	77,810	16,788	61,022		1,359	391	968		725	114	611	324	165	159	8,814	36,907		45,721	26,805	534	154	253	30	65,833	
	78 (40)	2,523,374	1,454,387	1,068,987		35,870	20,835	15,035		47,609	34,921	12,688	10,089	6,828	3,261	194,336	200,343		449	395,128	534,265	22,170	6,284	7,132	1,305	2,238,194
	20 (11)	406,121	155,256	250,865		14,441	4,787	9,654		5,788	2,195	3,593	3,122	1,713	1,409	11,877	93,078		292	105,247	108,920	4,476	688	2,384	431	447,611
	10 (6)	351,774	71,080	280,694		8,480	1,801	6,679		5,327	1,040	4,287	2,034	717	1,317	9,274	148,656		306	158,236	63,303	3,356	1,140	1,310	248	309,500
	17 (6)	307,593	143,156	164,437		7,195	3,233	3,962		6,531	3,009	3,522	2,549	1,587	962	26,102	116,420		931	143,453	123,537	5,355	2,460	605	348	294,639
	6 (2)	126,527	68,694	57,833		4,370	2,748	1,622		1,435	603	832	1,401	1,079	322	3,622	44,081		300	48,003	36,243	1,279	317	418	72	123,667
	53 (25)	1,192,015	438,186	753,829		34,486	12,569	21,917		19,081	6,847	12,234	9,106	5,096	4,010	50,875	402,235		1,829	454,939	332,003	14,466	4,605	4,717	1,099	1,175,417
	131 (65)	3,715,389	1,892,573	1,822,816		70,356	33,404	36,952		66,690	41,768	24,922	19,195	11,924	7,271	245,211	602,578		2,278	850,067	866,268	36,636	10,889	11,849	2,404	3,413,611

注)職員数は平成16年5月1日現在

会 議

学 内

17. 1.19 平成16年度第4回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 概算要求事項の整理について
- 2) 職場の安全衛生管理（避難誘導訓練）について

・報告事項

- 1) 古典資料修復保存小委員会について
- 2) 国立大学図書館協会理事会（平成16年度第3回）について
- 3) 第78次国立七大学図書館協議会について
- 4) 東北地区大学図書館協議会総会について
- 5) 平成16年度第1回研修・出張報告会等の開催について
- 6) 副館長選考の在り方 WG について
- 7) 平成16年度第1回齋藤養之助家史料受入・整理検討委員会について
- 8) 平成16年度第2回学生用図書整備検討委員会について
- 9) 平成17年度共通経費（参考図書費）所要額調について
- 10) 身障者学生への教育支援対策事業について

17. 3.17 平成16年度第5回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 学生用図書整備検討委員の検討結果について
- 2) 総長裁量経費（継続・新規）について

・報告事項

- 1) 平成16年度外国雑誌（前金）精算金額と納入率について
- 2) 電子ジャーナルの大量ダウンロード事故の発生について
- 3) 新入生オリエンテーションについて
- 4) 避難誘導訓練について

17. 2.23 平成16年度第3回附属図書館商議会

・協議事項

- 1) 平成18年度概算要求事項及び平成17年度予算案について
- 2) 副館長選考の在り方について
- 3) 年度計画における対応状況について

・報告事項

- 1) 図書館図書管理細則の一部改正について
- 2) 学生用図書整備検討委員会について
- 3) 齋藤養之助家史料受入・整理検討委員会について
- 4) 身障者学生への教育支援対策事業について
- 5) 避難誘導訓練について
- 6) 各分館からの報告について

17. 3.24 平成16年度第4回附属図書館商議会

・協議事項

- 1) 学生用図書整備検討委員の検討結果について
- 2) 総長裁量経費（継続・新規）について

・報告事項

- 1) 平成16年度第4回学生用図書整備検討委員会について
- 2) 貴重図書等選定委員会及び古典資料等修復保存小委員会合同委員会の開催報告について
- 3) 電子ジャーナルの大量ダウンロード事故の発生について
- 4) 古地図類のオンデマンド出版契約について
- 5) 全学電子認証システム（学生用）について
- 6) 新入生オリエンテーションについて
- 7) 平成17年度企画展「江戸の食文化(仮称)」の開催について
- 8) 平成16年度入学試験経費（情報改善分）の配分について
- 10) 避難誘導訓練について

人 事 異 動

平成17年 3 月31日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
17. 3.31		大 西 仁	図書館長	任期満了
"		宮 本 博 芳	総務課庶務係長	定年退職
"		原 千代子	准職員(情報管理課・図書情報係)	任期満了
"		佐 藤 恵 美	事務補佐員 (情報管理課・図書情報係)	"
"		村 上 園 子	事務補佐員 (情報サービス課・閲覧第一係)	"

編 集 後 記

国立大学の法人化から間もなく1年が過ぎ去ろうとしています。様々な変革の渦中であって不安と戸惑いを感じつつも、本年度の附属図書館では、全学教育科目「図書館を活用した情報探索・レポート作成術」の授業支援、企画展「江戸の数学 - いま、和算がおもしろい！」記念シ

ンポジウムをはじめとして、新たな試みにも挑戦いたしました。これらの新しい蕾を大切に育て上げ、さらに美しい花を实らせたいと考えています。

最後に、本年度も多くの方々にご寄稿をいただきましたことを、改めて感謝申し上げます。

(K)

東北大学附属図書館報「木這子」 第29巻第4号（通巻109号）発行日 平成17年 3 月31日

発行人 内藤 英雄 広報委員長 諏訪田 義美

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022 - 795 - 5911, FAX 022 - 795 - 5909

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>